

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

天賦の一路

――マルコ伝9章38～50節――

1965年2月14日

小池辰雄

一回限り 大きく取り入れる気持 魂の問題 自己自身との戦い 平面の論理ではない 人はいろいろ 天賦が即天命 十字架を通じて神の栄光体に 自分の課題 『楽聖物語』 最大の傑作は彼自身 存在そのものが天賦 海塩・和光同塵

【マルコ9・38～50】

38 ヨハネ言う『師よ、我らに従わぬ者の、御名によりて悪鬼を逐い出すを見しが、我らに従わぬ故に、之を止めたり』³⁹ イエス言い給う『止むな、我が名のために能力ある業をおこない、俄に我を譏り得る者なし。⁴⁰ 我らに逆らわぬ者は、我らに付く者なり。⁴¹ キリストの者たるによりて、汝らに一杯の水を飲まする者は、我まことに汝らに告ぐ、必ずその報いを失わざるべし。⁴² また我を信する此の小さき者の一人を躓かする者は、むしろ大いなる礪白を頸に懸けられて、海に投げ入れられんかた勝れり。⁴³ もし汝の手なんじを躓かせば、之を切り去れ、不具にて生命に入るは、両手ありて、ゲヘナの消えぬ火に往くよりも勝るなり。⁴⁴ もし汝の足なんじを躓かせば、之を切り去れ、蹇跛にて生命に入るは、両足ありてゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。⁴⁶ なし⁴⁷ もし汝の眼なんじを躓かせば、之を抜き出だせ、片眼にて神の国に入るは、両眼ありてゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。⁴⁸ 「彼処にては、その蛆つきず、火も消えぬなり」⁴⁹ それ人は、みな火をもて塩つけらるべし。⁵⁰ 塩は善きものなり、然れど塩もしその塩気を失わば、何をもて之に味つけん。汝ら心の中に塩を保ち、かつ互いに和らぐべし』

●一回限り

38 ヨハネ言う『師よ、我らに従わぬ者の、御名によりて悪鬼を逐い出すを見しが、我らに従わぬ故に、之を止めたり』³⁹ イエス言い給う『止むな、我が名のために能力ある業をおこない、俄に我を譏り得る者なし。⁴⁰ 我らに逆らわぬ者は、我らに付く者なり。⁴¹ キリストの者たるによりて、汝らに一杯の水を飲まする者は、我まことに汝らに告ぐ、必ずその報いを失わざるべし。』



42 また我を信ずる此の小さき者の一人を躓かする者は、むしろ大いなる礪石^{ひきうす}を頸^{くび}に懸^かけられて、海に投げ入れられんかた勝れり^{まさ}。

キリストは大きな心をもつて、「御名によつて悪鬼を逐い出す」ことを肯定されたわけですが、ところが、マタイ伝には全然それと違うような角度の言葉もある。マタイ伝7章21節に、

「21 我^{むか}に対して主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意^{みこころ}をおこなう者のみ、之に入るべし。22 その日おおくの者、われに對いて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐いだし、汝の名によりて多くの能力^{ちから}ある業^{わざ}を為ししにあらざや」と言わん。23 その時われ明白^{あらわ}に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。」(マタイ7・21、23)

この二つの記事は、その表面から見ますと、矛盾するわけです。イエスはもちろん、その場その場で——お釈迦さんもそうですが——その人、その場合に依じて、その時に適切な言葉を発するのであつて、いわゆる観念的な普遍妥当というようないふ、そういう真理ではない。福音の真理、実存的な真理というものは、いわゆる普遍妥当性ではない。いわゆる「原理」ではない。その時その時に——もちろん、根本精神は一つですけれども——その時に発せられるところの言葉は全然矛盾したような相が表れてくる。それは相手がいろいろですから、人間というものは具体的な存在ですから、具体的なものに対してその一番適切な言葉というものはその時に発せられ、一回限りのものです。質からいうと、一回限りであつて、いわゆる普遍妥当ではない。もちろん、道德の世界における原理としての普遍妥当ということは、カントが言つたような意味のことがもちろん一つの真理ではあるけれども。福音の消息としてはやはり——聖書には並べてみると矛盾したような言葉がたくさんある。だから、サタンがそれを

「「こうあるじゃないか」

と言つて使うわけです——そうではないということがはつきりとまた言えるわけです。

この場合、イエスは、

「我らに逆らわぬ者は、我らに付く者なり」

と言う。ダンテが地獄の中で、

「逆らいもしなければ付きもしない、どつちつかずというのがある。これは地獄にも天国にも入れないから、地獄の門外にたくさん置いてある。いわゆる中間者流が、

日和見者流がいかに多いかということに驚いた」

と、あの地獄篇のところに書いてある。キリストのこの言葉をみると、キリストはそういうたいい加減な者を肯定されているのかと、一応ちよつとそうもとれそうですが。けれども、今現に、我々の本当のこの角度にきていなくても、しかし、

「本当に御名というものを重んじて、その御名によつて業をしているならば」



ということ。御名を利用しているのではない。さっきのマタイ伝の方は御名を利用しているわけです。霊的な世界では、御名を利用して一念凝ればそれが働くこともある。それで恐ろしいわけです、この霊的な世界というものは。だから、問題は現象面ではない。いつも、質が問題である。宗教現象というものは、類似な現象はいくらでもありますから。「病の癒し」なんていうことだって、いろんな宗教がやるわけです。

「癒しの力がないから福音でない」

なんて、そんなことは絶対でない。

●大きく取り入れる気持

福音はどこまでも、マタイ伝にあるように、

「父の御意みこころを行う者のみ天国に入れる」

という。さきほどの讃美歌のように、

「主よ、御意をなさせたまえ」

といって、己を託している。自分の思いではない。あなたの思いである。それが本当ならば必ず、そこに神の、キリストの力が正しく聖旨のままに働くわけです。生命が現象するわけです。そういった本筋に従っているならば、なにも

「我々につく、つかない」

とか、

「信仰の面でどうも我々とはぴつたりこない」

とか、そんなことを問題にして、人を分け隔てすれば、それはいわゆるパリサイ主義になります。

「無教会的でなくてはいかん」

とか、

「教会的なのはダメだ」

とか言って、妙な判断をしてはいかん。どうも、無教会主義というものは、うっかりすると、というようなわけで、分け隔てをする傾向がなきにしもあらず。そういった主義主張を非常に強く言う人がありますが、これは非常に福音に対して危険である。その意味において、キリストのこういった、大きく取り入れる気持は大事なんです。また、信仰の世界でも、

「あれは信仰が弱いから、御霊を本当に受けてないから」

なんて言って、人を品定めしてもいかん。

どこまでも、イエスのような、そういった大きな立場が大事です。御霊に逆らう者は、これは仕方がない。

「御霊に逆らう者は、その罪は赦されない」



とキリストが言われるとおり。しかし、逆らっても

「本当に私は悪かった」

と言つて翻れば、それはまた新しく入れますよ。いかなることも、キリストの十字架の救いの前には、例外はないはずです。その時はもちろん赦されないけれども、のちに悔改めれば赦されるということはもちろんあるわけです。そういう意味において、イエスがこの場合に大きく言われたので、

「狭い考えをもつてはいかんよ」

ということだと思っています。

そして、その「悪鬼を逐い出す」とかいふ能力ある業、

「わが名のために能力ある業を行ふ」

とありますが、その後で、

41キリストの者たるによりて、汝らに一杯の水を飲ます者は、我まことに

汝らに告ぐ、必ずその報いを失わざるべし。

こういう言い方をなされると、何か報いを報酬を求めて、何かそれが少し心の中にあつて善行を行うような、ヘタすると、功利観念が出てくるけれども、もちろん、そういう意味で言われたのではない。実存の世界では、愛が最高の世界ですから――パウロが言っているとおり――その愛が空しくお終いになることはない。神の愛がその人を通して出たものは必ず善き花が咲き実が実る。天界において、それは善き花が咲き、実がみのる。それが「報い」という意味です。

「自然にその結果は表れるぞ」

と、こういうことだと思っています。

●魂の問題

ところが、

42また我を信する此の小さき者の一人を躓かする者は、むしろ大いなる礫白

を頸に懸けられて、海に投げ入れられんかた勝れり。

と。非常に強い言葉です。

「我を信する此の小さき者の一人を躓かする者は」

と、キリストはそう仰いましたけれども、たとえキリストを信じなくても、一人のまことの魂を躓かせる者があつたら、やつぱり同じことになると思います。「人間尊重」という言葉がこの頃ありますが、本当の意味における人間尊重というのは、そういうことなんです。

私は小学校を見学しないし、また、自分が小学校の先生ではないから、どうのこうのと言う資格はないかも知れないけれども、一番大事なのは幼稚園から小学校の、特に小学校



の先生方の使命だろうと思う。小さい人は非常に傷つきやすい魂ですから。また、非常に純な魂ですから。これを正しいことのために、真理のために、善きことのために、強い魂にすることが一番大事だと思うんですが、どの程度それが行われているか。いろいろな現象をみると、非常に憂えるべきことです。それは何も小学校の先生方ばかりの責任ではない。社会そのものの、家庭そのものの、たくさんの責任が分担されているけれども。とにかく、日本の一番の、最大の問題はこの魂の問題です。結局、魂の問題です。小さい人から大人に至るまで、問題中の問題はやはり魂の問題です。それを害^{そこな}うということ。そういう意味で私は、「躓^{そこな}かせる」というのは結局、

「魂を害^{そこな}う」

ということだと思います。即ち、

「人ひとりの存在というものは全世界とも代えられない」

と、キリストは言われた。その生命は、そのプシヘーは——「プシヘー」は「ソウル」「魂」とも訳されてもいい言葉です——その魂は全世界とも代えられないように、一人びとりの魂はある。

「これが害われたならば、躓いたならば」

ということですので、いつも問題はそこに帰してくるわけです。

私はなにも、小学校のときに宗教教育を受けたわけではないけれども、しかし、修身の時間に——私は修身の時間、先生のお話を聴くのが好きだった——いろいろ実例をもってお話をなさいました。私の心は非常に感激したことがしばしばであった。やっぱり、そういった本当に人の魂を感激させる、心を或は奮い立たせ或は慰めるといったようなお話を——私は高等師範の附属小学、中学で教育を受けたんですが、確かにあの頃の先生方は人格的な先生方でありまして、ことに校長が非常に立派な校長です——月曜日の朝、全校生徒にお話をなさるんですが、私はどの話もつまらなかったと思ったことがない。決して、形式的なお説教的な話をなさらない校長でした。やはり、そういった教育というものが結局、本当の意味において魂を育てていくことだということに、もつと今の時代は新しく自覚されなければならないということをつくづく思う。

キリストのこの

「小さき者の一人を躓かする者は」

というのは、「魂を害^{そこな}う者は」というように、私はどうしても読まざるを得ないわけです。

●自己自身との戦い

43 もし汝の手なんじを躓かせば、之を切り去れ、不具^{かたわ}にて生命に入るは、両手ありて、ゲヘナの消えぬ火に往くよりも勝るなり。

「ゲヘナ」というのは「ゲンヒンノム」「ヒンノムの谷」ということ。「ゲン」というのは



「谷」という字です。エルサレムのシオンの山のわきに溪谷がある。大昔は、そこで人身御供も行われたような所です。何か、棄て場所であつたらしい。そこで、そこが地獄の一つの象徴みたいになつてしまつたわけです。「ゲヘナ」というのはそこからきた。そういった地獄の消えぬ火に行くよりも勝るのであると。

天国というところは、とにかく、真理のために、福音のためには何か傷を受けて、傷を負つていくようなところですよ。

「総身完膚無き迄に」
かんぶ まで

というような言葉もありますけれども、とにかく、のほほんでもつて天国には行けない。いわゆる、手がない足がないとか、目がないとか、耳がどうかとか、ということではない。それはただ表現の上の象徴的な言葉です。我々が本当に天国に入るためには、

「生くるは戦いなり」

というが、その戦いです。戦い、特に己自身との戦いです。「克己」という言葉があるとおりの。自己自身との戦いが最大の戦いです。この戦いを、とにかく自己に対し、またその周囲のいろいろな事態に対して戦っていく。そうすれば、傷を受ける。その傷を負つて、或は手がなくなつたり、足がなくなつたりしても、それでも地獄に入るよりも、天国へ行く方がはるかに勝っている。健全な身体で、何も真理のために傷を負わないで地獄へ行くよりもはるかに勝っている。このキリストの御言をみますと、天国というところは、とにかく戦わない人は――「働かざる者は食うべからず」というけれども――

「戦わざる者は天国に入ることができない」

と言つてもいいと思う。人生を真剣に生きようとする人は必ず、何らかの意味において戦いがある。私は詩篇の訳を書いたときに、序文にそういったようなことも書いたことがある。

●平面の論理ではない

そういうわけで、

「汝の手が蹟かせたら、之を切りて棄てよ」

と。何か手が悪いことをしたら、自分を蹟かせたら、そんな手は切つて棄ててしまえと。非常に激しいことをキリストは仰る。

45 もし汝の足なんじを蹟かせば、之を切り去れ、蹇跛にて生命に入るは、両
あしなえ
足ありてゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。

何か怒つてしまつて、人を蹴つ飛ばすようなことをすれば、そんな足はけしからんから、切つて棄てろと。まあ、象徴的ですけどね。もちろん、そういった気持で言われたわけですよ。そうすると、こういった御言があるものですから、非常に中世で禁欲的なことをして、自分を鞭打つようなことをやった神秘家たちもあるけれども、それはキリストの言葉*を*いわゆる文字通りのはきちがいをしたわけです。



ヨハネ第一書2章15節のところに、

「¹⁵なんじら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父の愛する愛その衷^{うち}になし。¹⁶おおよそ世にあるもの、即ち肉の慾・眼の慾・所有の誇などは、御父より出づるにあらず、世より出づるなり。¹⁷世と世の慾とは過ぎ往く、然れど神の御意をおこなう者は永遠に存^{とこしえ}なり。」（ヨハネ一2・15、¹⁷）

とある。非常に大事な三節です。

「世をも愛すな」

とあると、しかし今度は、ヨハネ伝3章16節には、

「それ神はその独子^{ひとりご}を賜^{たま}うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡び

ずして永遠の生命を得んためなり。」（ヨハネ3・16）

「神はその独子^{ひとりご}を棄てるほどに世を愛し給えり」

という。その意味の「世を愛する」というのと、この場合の「世を愛する」ということは違う。どうか、聖書の文句は決して、平面的な、並べて読むようなことをなさらないように。平面の論理ではないですから。即ち、世に与^{くみ}してしまつて、そして、神の国のことがそつちのけになつてしまうようなことでは、もちろん神の国には入れない。御父を愛する愛はそこにある。本当に父を愛する愛によつて世を愛するということは、また別な意味でもつてあり得るわけです。そうでなくて、手離して世を愛するとなつたら、今度は世にくみすることになる。世にくみするのではなくて、本当の

「世を愛する」

ということとは、

「世を救い上げる」

ことが世を愛することなんです。言葉というのは、いろんな使い方がありますが、どうぞ、言葉面にとらわれないようにしてください。

「おおよそ世にあるもの、即ち肉の慾・眼の慾・所有の誇など、こういったものが自分を躓^{もつ}かせるときは、それを切つて棄てろ」

と、キリストは言われるわけです。

ダンテが、そういった躓きをしたいろんなご連中を地獄に分類して、つつこんでいるわけですね。眼というのはいろんな働きをするから。ダンテは、嫉妬みたいな眼は、

「針金でその瞼^{まぶた}を閉じられていた」

なんてことを書いてるけれども。

そういった意味において、

「二途^{いちず}に神中心、キリスト中心で、天国、神の義、神の国、福音というものを中心にして行け」



というので、今日はそれから少し展開したような気持ちから、「天賦の一路」と題してみたわけです。

●人はいろいろ

私たちはみな生まれつき、一人ひとり天賦をいただいている。天来の才能をいただいているわけです。ある人は非常に人にうらやまれるような天才的な人もありましょうし、

「どうも一体、自分の天賦というものは何であろうか」

と、一向わけの分からないような人もあるでしょうし。まあ、人はいろいろですね。

自分のやりたいこと、生まれつきもっているところの何か自分の特色というものが、皆さん、おありなんです。それが商売であろうと、あるいは銀行のことであろうと、医者のことであろうと、絵のことであろうと、法律のことであろうと、何であろうと。みんな、あるわけです。社会のいろいろな事情、生い立ち、環境ということから、なかなかそれをいきなり發揮していくわけには、そればかりに没頭していくわけにはいかないというのが、現状現実です。そのために日本の社会機構を大いに改良しなければならない面があるわけです。天綸に安んじてその人たちが本当にそれを伸ばしていく。何でもかんでもみんなが大学に入ることでもない。そういうように本当に天分を伸ばしていく環境を与えるということが、ひとつの政治的な問題でしょう。

とにかく、いろいろな不如意な人生の経路を通りながら、それでもとにかく、自分の一番賜つているところのものは自分の一番したいと思うことです。やつぱり、自分のしたいと思うことを――それはそのうちに変わってくるかも知れませんよ――けれどもとにかく、

「本当にこれはしたい」

ということをやっていく。さつき、

「仕方がなくて、どうしてもそういうように追いやられる」

と言うけれども、大乗的な意味において、これも素晴らしい「したいこと」なんです。そのように、T君が新しく行こうという。それは大いに――そういう人が今この福音の世界で大事ですからね――大いにやっていただきたいと思う。しかし、みんなが何も福音の第一線に立つということではない。しかし、第一線に立つといっても、どのように神さまは導くかは、それはまた具体的には分かりませんが、

●天賦が即天命

とにかく、自分の賜つたものを、その天賦の一路を――今それが一路でないように見えても、質的にはいつもそれが自分の生活の中心にしっかりあって、それをめぐって螺旋形でも何でもいいです――とにかく展開して行く。これが大事なことです。いきなり、環境をすぐパツと切つて、辞めてしまうというようなことは、なかなか現実の問題としてでき



ない場合があるし、またできる場合もありましょう。それは人によっていろいろですから、かくあれということは言えませんが。しかし、境遇的にどういような不遇的なものを背負ってしましても、神さまに与えられたその自分の天賦が即、使命なんです。天的な――「天使」といつてはおかしいけれども――「天命」だ。天命なんだから。天賦が即ち天命である。与えられた自分の一番の本質、自分に一番本質的なもの、そこに天命がある。その本質的なものが、才能であるか、意志であるか、あるいは何か非常に優れた感情的なものであるか、知りません。とにかくしかし、そこにおいて一番無理のない天賦を伸ばしていく。

「なかなか、自分は職業の関係でそういきません」

という人もあるでしょう。けれども、それでもなお、そのものをコツコツ、コツコツと仕上げていく。たとえそれが地上で仕上がらなくなつていい。神の栄光がそこにおいて現れるというものは、その人の一番の本質、正に本質です。本質であり本体であるところのもの、一番中心的なところのもの。この中心をはずれたら、それは本当のものは出てきません。そのときに皆さんは、人にどう思われようと、そんなことはいいですよ。その中心的なものはみな神の栄光の現れで、御利益でも何でもありません。自己を宣伝するのでもなければ、自己の名をあげるのでもない。神の栄光の現れとして、これを自覚している。

そのことは、キリストが、次のマルコ伝10章で富める青年に言われた。

「富において誇つていたら、その富を棄てろ。しかし、その富を棄てたつて、本当に私と一つになれば、今の富の百倍を受けるぞ」

と。その「百倍を受ける」のは、「お前にやる」というのではない。

「その百倍を、神の栄光のために十全に使え」

と。こういう意味です。キリストはそこまで説明はしていらつしやらないけれども、そういうことです。

●十字架を通じて神の栄光体に

すべては神の栄光の現れるところという、その自覚に本当の力がある。そうでなければ、本当の力を出てこない。また、本当の光は発しない。天賦を自覚すること、即、天命である。自分の今の職業が果たしてそうであるかどうかは、いろいろな場合があるから言えません。けれども、それをとにかく自覚して、職業をしながら、自分の課題としたものに向かつて邁進まいしんしていく。それが存在的な伝道です。

「本当にあの人は、神の栄光のために生きていた。そこにおいてキリストが証されていた」

と。ある人は伝道の一線に立つでしょう。ある人はそれぞれの職業において、また家で働くことにおいて。何でもいいですよ。とにかくその存在において、自分という本来の我、というものが――それは自我という我ではない――賜りたる我、というものがそこにおいて現



れる。

そのためには、一遍、十字架を通っていなければダメだ。十字架の贖いを通って、これを天命として自覚し、神の栄光として自覚していく。そのためには、十字架によって本当に自我というやつがすつ飛ばされたところに、この自覚が出てきますから、今度は天賦の一路を邁進して行くことができることになるわけです。

それは、生活しているうちに、

「ああ、自分の使命はこういうところにあった」

ということに、新しく気がつくことだつてある。それはいろいろなケースがあるから。

●自分の課題

私みたいなしょうがないやつでも、とにかく、遅ればせながら、ある一つの使命を、自分の課題をいよいよ自覚しつつあるので、それを何としても仕上げていきたいと思うわけです。もう、とにかく60歳になったから、そう時間もたくさんあるわけではないから、そちらの方に中心をもつていく。もちろん、私はやむにやまれないものを持っているから伝道はしますけれども、しかし、私に課せられたもう一つ奥の仕事がある。それを世に投げなければいけないというものが、どうしてもある。そこを私は中心にして行きます。しかし、皆さんとこの福音の戦線から私は退くわけでも、もちろんありません。

どうか、若い方々が、福音の戦線をだんだん展開していただきたい。幾人かの人々が、それに携わつてくださると思います。しかし、パウロも幕屋造りをしていたし、今この現状の現実において、神さまがどのような路をその人には与えるかということは、一人ひとり違いますから。どうか、そこはよく熟慮しまた本当に祈って、自分の生き方、一番本来の生き方をもつて行つていただきたいと思います。

内村鑑三先生も――先生はあれだけの才能があるからね――独立独歩して行かれたけれども、人によつていろいろですから。とにかく、その独立をもちながら、しかし、私たちはお互いに助け合い、また大きな有機体的な展開をしていくのであつて、これがバラバラに分裂していくのでは本当の力にはならない。その意味において、我々は兄弟姉妹としてのスクラムはお互いに組んで、そして、福音のためにそれぞれ助け合つて行きたいと、こう思うわけです。

●『楽聖物語』

これは、私が1942年に九州の方で凄い伝道をして帰つて来て、肺炎になつてしまつて、その病床で読んだ本ですが、あらえびす(野村長一氏のペンネーム、また野村胡堂とも1882～1963)さんの『楽聖物語』という、非常に熱情をこめて、ちょうど私の年輩の頃に書かれたものです。さすがにやつぱり、あらえびすさんは音楽評論家としては第一



流の人です。評論というよりも、この人は本当に偉大な音楽家を愛して、そういった角度から書いている。私はあの時に感激してこの本を読んだことを覚えています。たとえば、バツハのところを見ますと、

「彼は名声を喜ぶようなあさはかな人間ではなかった。もとより金のためにはたった一小節も作曲したわけではない。ただ神を讃美するために、自分の職責を全つするために、珠玉にも比ぶべきカンタータを、毎週一曲ずつ作り捨てたのである。」

それを別に保存しておかない。奥さんが紙屑籠の中から拾ってきて、それで集めておいたから、後に遺ったんです。鳥が虚空に向かつて歌をうたうように、バツハという人は本当に神にあつて賛美した人です。バツハの音楽が神的な天的な響きをもっているのは、そういう彼の魂の、その心の姿が表れているわけです。

「芸術は斯の如き動機において作るところになくて始めて尊い。彼の音楽が後世俗樂者流の企て及ばざる高貴なものを持つてゐるのは、その天才に起因するばかりでなく、実にこの心ばえに原因するものと言つべきであらう。名利に超然とする人はあり得るが、この芸術的作品をさへ、神に捧ぐる以外に執着を持たなかつた人は、少なくとも音楽の分野においては、ヨハン・セバスティアン・バツハ以外にはあることを聴かない。」

ベートーヴェンといえどもこのバツハの境地からはやはりかなわない、というわけです。もちろん、ベートーヴェンは打算的のものをしたのではない。彼も本当に打ち込んでいますから、ベートーヴェンはベートーヴェンの善さがあるけれども。このバツハの天的な澄みきつた善さというものは、ちよつとこれは他に類例がないというわけです。

「バツハの音楽に「神性」を見出すのは即ちそのためである。後世の芸術に携わるものが、神を対象としたバツハに比べて、その心構えにおいてなんという違いであらう。芸術が神性を失い、人間性を失い、今や獸性をさえ帯びんとしているのも当然のことである。我らの世紀は「悪魔」のために作つた音楽のあまりに多きに堪たえざらんとしている。」

これは今から20年前の筆ですから、今はこれ以上の惨憺たる情況があるかと思われれます。絵画の世界においても、かなり同じことが言えるのではないかと思います。

ここには書いてないけれども、ベートーヴェンのことを私はずつと前に書いたことがある。グリルパルツァーの、ベートーヴェンの墓を建てた後の除幕式の際の有名な演説がある。その中で忘れることのできない文句がある。

「ここに横たわれる人は靈感ゆたけき人であつた！ 唯だ一つを追求し、唯だ一つの為に耐え忍び、一切を唯一のために投げ棄てながら、この人は生涯を費した。妻なく、子なく、喜びも殆どなく、楽しみも乏しく、一方の眼が彼を躓かせれば、これを扶摘するといった気魄で彼は目的に向つて邁進したのであつた。」

「唯だ一つ」というのは即ち、ベートーヴェンにとっては音楽です。彼は耳がつんぽになつたものだから、一遍、自殺しようと遺言状まで書いて、ドナウ河に身を投じようと思つた



んだけれども、それから後20何年か生きのびます。その思いとどまったのも、ただこの芸術ため。しかもそれは、

「これから自分は本当に人を慰め、人を励ますためにだ」

と。そう言つて彼が立ち上がつて、自分の肉の耳には聞こえないけれども、霊の耳で聞きながら、音楽に没頭したわけです。これは天賦の一路を本当に生きた人です。ベートーヴェンはちよつと非常に人嫌いのようだけれども、彼は実は本当に暖かい心をもっていたと、この本にもそのことは書いてある。それは、つんばで話ができないから、仕方がなしに、そういうことになつたんでしよう。

●最大の傑作は彼自身

バッハやベートーヴェンやシューベルトという一流の音楽家また一流の画家、その他一流でなくても、名も知れないような人たちでも、とにかく、一生を或ることに献げていくという姿は非常に尊いことです。ダンテの『神曲』もその角度からできあがつたものです。何を皆さんがなさいまして、その一生をそれに献げる。しかし、何をいたしましても、帰するところは一つですよ。

私はドイツ人の書いたゲーテの伝記を読んでいたら、その言葉に、

「ゲーテの最大の傑作は何であるか。たいてい、皆は『ファウスト』だと言うに相違ない。けれども、ゲーテの最大の傑作は彼自身であつた。」

という。即ち、ゲーテという人自身が彼の最大の傑作である。即ち、彼自身が本当に芸術的な作品なんです。『ファウスト』は、60年間ゲーテの全生涯を費やして書いた。ヘンデルの『メシヤ』というのは、4週間でもの凄い迫力で書き上げたそうだね。とにかく、

「人間そのものはその業^{わざ}以上のものである」

ということですよ。「業以上のもの」というような、そういった人間でなければ本当の業はまた、出てこないはずですよ。

イエス・キリストの福音書の中のいろいろな素晴らしい御言、またその御業はとても桁ちがいで誰もかなわん。けれども、イエス・キリストの最大の傑作はやはりイエス・キリスト自身である。甦^{よみがえ}りの生命をもち、また御霊をもつて今もなお私たちに自由自在に一人びとりに働きかけてくださるところの、このイエス・キリスト自身は、何と言つたつて、これは神さまの最大の傑作ですよ。書かれた何ものかではない。キリストもお釈迦さんも一字も書きはしない。彼自身が本当の^{ふりゆう}不立文字であり、彼自身が傑作そのものである。

●存在そのものが天賦

だから、皆さんも、「天賦の一路」というけれども、実は天賦そのものは、我々の存在そのものが天賦である。何ができなくても、どんなことが自分の生涯の業か分からなくても、



「どうも、自分の本質がつかめない、自分のしたいことが分からない」

というようなことであっても、自分の存在そのものが天賦である。そういうわけですから、為される業がどこで途中で倒れても、

「アーメン、ハレルヤ！」

と言って——「未完成の完成」ということを来世に約束されていますから——それで進んで行く。何も人をうらやむことはない。

「あの人はあんな才能があつていいのどうの」

なんて、何もありやしない。

「最大の傑作はゲーテ自身であつた」

というけれども、あの天才ですら、本当の意味においてはそうです。私たち自身が——パウロが

「汝らはキリストの書である」

と言つたが——キリストの活ける書である。即ち、それが証者であるということです。

そうすれば、もはや、手が何をしたか、足が何をしたか、そんなことを気にすることはなくなる。どこで切ろうが切るまいが、そんなことは気にすることはなくなる。イエス・キリストのこういった御言のもうひとつ奥の世界をつかまえて、その御言を本当の意味において満たす乗り越え方をしないと、福音に逆に躓く。

どうか皆さん、そういうような在り方をしてください。もう楽しくてしょうがない。大丈夫です。そして、私たちは課せられたところを本当にしていく。その在り方は、人間ですから現実にはいろいろな紆余曲折があるでしょう。しかし、どこまでも磁石が北を指すように、いくら振れても北を指すように、キリストを指さざるを得ないところのものになつていけば、どういふことがあつてもその一念でいけば、その天賦の一路が貫かれていくし、未完成の完成であるし、失敗の成功であり、涙の歓喜である。それだけの積極的な——人生観ではない——人生道を私たちが行かなかつたら、何の福音ぞやということ。私たちの使命は、この福音の使命はそこにある。

その点では、私はやはり、やむをえざるなりで、この福音の伝道を一步も退くわけにはいかん。そのことと、私の或る一つの仕事とは決して矛盾もしなければ分裂もしない。むしろ、車の両輪みたいな気持をもっております。そして、進んで参ります。

真実性とか、理想主義的な妙な観念にとらわれると、かえつて本当の力が抜けます。どうか、弾力性のある、しかし、中心のはつきりした人間として進んでいただきたい。そうすると、これが本当のチームワークになる。

しかし、いわゆる熱心な人の書いた雑誌なんか読むと、息が詰まるんだよね。何か非常に熱心なだけでも、この福音の豊かな生命力とはちよつと違う。我々の福音というのは、そういう広大無辺なる、しかも本当の乾坤を貫いたところの動力を、中心をもつた



ものである。その戦いをしていけば、この神の国にキリストは必ず入れてくださる。そこを誤魔化さずに進んで行きたいと思うわけです。

昔の一流の人たちのことは、どうでもいいですよ。とにかく、質的には、私たち一人びとりという存在が一流の作品にならなかつたら、神品しんぴんでなくては、それでなかつたらつまらないです。この福音は、皆さん一人びとりが一流の神品となるためにいただいている。その神品は神の栄光ですから。マルコ伝のこここのところを読むと、私はそんな気持ちになつてくる。

●海塩・和光同塵

⁴⁹それ人は、みな火をもて塩つけらるべし。⁵⁰塩は善きものなり、然れど塩もしその塩気を失わば、何をもて之に味つけん。汝ら心の中に塩を保ち、かつ互いに和らぐべし』

と、おもしろいことが書いてある。塩辛いというと、人を何か排除するような塩辛さがあるけれども、

「かつ互いに和らぐべし」

とキリストが言われる。

「あの野郎は塩辛くて、どうも交わりにくい」
なんていうのでは困る。

海の水を見よと。海の水は塩辛い。どこの海に行きましても、世界中の海の水は塩辛い。あれは本当に不思議だね。汚物でも何でも全部これを海に流しこんでいる。そして、海の水はそれを溶かして浄化してしまう。天然は全部、浄化作用でもつて――また蒸発して雲や霧となつてくれば、真清水となつて山の中から現れてくる――水が循環している。

そういった大洋の塩のごとくという。どれが塩かという、しょうがない、これは採りようがない。どれが塩かといつても、その姿が見つからない。けれども、ちゃんと水を塩づけにしている。塩味をつけている。

「あの人はこういうところが塩辛い」

なんて、すぐ対象的につかまえられるような塩辛さではダメですよ。ちゃんとふんわりと何でも容れてしまう。何でも入れてしまうけれども、どうでもいいのではなくて、ちゃんとそれは、入れてしまったものを浄化してしまう。そういった塩が大事なんです。

光の世界でもそうです。何でも取りいれて、その光の中に入れてしまう。和光同塵という。光を和らげて――

「俺は光だ」

と言つて、ギラギラ光るような光ではいかに――光を和らげて、そして、相手の人を本当に和めるのが和光なひという。



「あいつは塵だ。汚らしい」

なんていうのはダメなんです。同じ塵となる。パウロは

「我は世の塵芥ちりあくたの如し」

と言ったではないですか。即ち、自分を本当に塵芥として、また自分を本当に和やわらかい光として、相手をみんなその中に包んでしまう。海水が――海塩というのが――この和光同塵と同じ言葉ですよ。海塩・和光同塵。海の塩、和らかき光、塵と同じ姿となって相手を救うのが、キリストやお釈迦さんはみなこの和光同塵であった。そして、パリサイ人びとはこの和光同塵にはなれない。己を強がったり、己を清しとしたり。そういうことではダメですよ。やんわりとみんな包み込んで、

「ああここに本当の救いがある」

と。そして、それが本当に浄化され、喜びの世界に入れられていく。

「和らげ」

とキリストが言われたのはそのことです。塩となって、やわらかい塩であれと。海の塩はやわらかい塩である。イエス・キリストもたまには、「宮聖め」なんていつて、叩き出すということもなさったけれども。キリストの実存にはいろんな面があります。

しかし、私がしょっちゅう申し上げているとおり、

「大自然の如くあれ」

というのは――決して一本的なことでは本当の伝道もいきませんぞ――人間との交わりの世界はやはり、自分を僕としてどん底に立てているような、また、塵となり、和らかき光となつて浸透していくような事態、これが愛の本当の力です。この力が一番本当の力です。

イエス・キリストがその塩です。しかし、塩は塩としてつかみ出すことができないが、しかし、そこに本当にあるというような在り方。空気は空気としてつかみ出すことができないが、私たちは空気を吸っている。光は光としてつかみ出すことができないが、光を浴びている。本当の世界はみなそのような、超在し貫在し内在し極まりないところの事態です。私の、いわゆる集会にも何もなりはしませんよね。しかし、イエス・キリストは喜んでくださると思う。

「そうだ。そういうようにして、私は福音をお前たちに伝えただ」

と仰つてくださると思います。この次もまた別な読み方をするかも知れませんが、とにかく、バツハがカンタータを書きながら、何のくつたくもなくそれを棄てていくような、そういった神の栄光の現れということです。

しかし、皆さん、天賦がどうあつても、どんなに私みたいな凡人であつても、心配はいらん。それは御霊が一切をなしたもうから。そして、御霊は本当に人を救う根底的な力ですから、この和光同塵的なところを心にもつていく。とげのある人はダメだね。とげをすっかり棄てて、本当に円現していかないと。今日は、それくらいしておきましょう。

